

長崎の鐘

永井 隆

「新しき 朝の光のさしそむる 荒野に響け長崎の鐘」の短歌を読んだ永井隆(1908～1951年)は、1945(昭和20)年8月9日に原子爆弾が投下された時、長崎医科大学(当時)の診察室にて被爆し右側頭動脈切断の重症を負った。最愛の妻もその時自宅で爆死している。自らの傷も省みず、長崎市三山木場に救護所を作り、物理的療法科助教授第11救護隊の指揮をとり救護・救援活動に当たった。「125名の原子爆弾患者を診察し、治療延日数は1,829日である。開設期間は58日間。従業隊員は12名である。死亡率は23%であった。」と、原子爆弾報告書に記録されている¹⁾。のちに永井は、被爆直後の様子を「地獄だ、地獄だ。うめき声一つ立てるものもなく、まったくの死後の世界である」と綴っている²⁾。

長崎大学医学部正門を入り、雑木林の続く小高いグビロヶ丘に、被爆した大講堂玄関の石柱残骸を用いて建立された「慰霊碑」の大文字が雄渾に刻まれた原爆被災者慰霊碑がある。台座の裏側には永井隆博士の「傷つける 友をさがして火の中へ とび入りしまま帰らざりけり」の歌が刻まれている(写真1)。

1908(明治41)年、島根県松江市に生まれた永井は、長崎医科大学(現・長崎大学医学部)を卒業後、放射線医学の治療と研究に従事。「私の放射線室に実際に働いていた時間は毎日十時間に達していたろう。一日0.2レントゲン単位をずいぶん上回る放射線が私の肉体に打ち込まれていた。このまま数年続けるなら、恐ろしい原子病の起こることは、日食を予報するのと同じ確実さでわかっていた。」当時最も深刻な病気だった結核治療に励み、放射線防護が未発達だったこともあって、慢性骨髄性白血病にかかった³⁾。

またカトリック教徒の永井は「世界大戦争という人類の罪惡の償いとして日本唯一の聖地浦上が犠牲の祭壇に屠られ燃やされるべき潔き羊として選ばれたのではないでしょうかと、原子爆弾合同葬弔辞でカトリック的ロマンチズムも説いた²⁾。晩年の永井は、2畳ほどの「如己堂(によこどう)」で病と闘いながら診察と執筆に専念した⁴⁾(写真2)。「己の如く他人(ひと)を愛す」というキリストの言葉からとったもので、白血病に倒れた晩年の永井は、病に伏しながらも執筆に



写真1 永井 隆の句(長崎大学・原爆被災者慰霊碑台座)



写真2 如己堂(長崎市)

専念し17冊の著書を残し、1951(昭和26)年5月1日に死去した。

2016(平成28)年5月27日、バラク・オバマ元米大統領が広島を訪問し、原爆死没者慰霊碑に献花した。核兵器なき世界を希求する所感を読み上げ、広島の前爆について「空から死が落ちてきて、世界が変わった。」と述べたことに疑問を感じた人は多いと思う。あたかも自然現象のような詩的な言葉で、原子爆弾投下の米国の責任を回避する表現に他ならない。

また長崎の爆心地公園を歩いてみても、「原子爆弾落下中心地碑」の前に立つと同じような疑問を感じる。原爆はりんごと同じ落下ではなく、目的を持って投下されたのである。公園名と同じ「爆心地」の標記が適切なのではないだろうか。

参考資料

- 1) 永井 隆, 原子爆弾救護報告書, 長崎大学原爆後障害医療研究所 資料収集保存・解析部, <https://www.genken.nagasaki-u.ac.jp/abcenter/nagai/index.html>
- 2) 永井 隆, 長崎の鐘, 勉誠出版(2009)
- 3) 永井 隆, この子を残して, 中央出版社(1976)
- 4) 永井 隆, 平和塔, アルパ文庫(2001)

(日本診療放射線技師会 諸澄邦彦)